

経済発展における伝統的社会と社会的勢力

(36年10月18日講演) G. バランディエ

ジョルジュ・バランディエ Georges Balandier氏は去る十月中旬戦後における日仏社会学交流による最初の社会学者、文化使節として来日された。バランディエ氏はアフリカ黒人社会研究者として著名であり、現在パリ大学の高等研究所の応用研究部長(Directeur de L'Etude Pratique des Hautes Etudes, Sorbonne.)で、ほかに国立政治研究所の所員をかねるほか、フランスの社会学雑誌として有名な国際社会学研究誌 Cahiers Internationaux de Sociologie の事務局責任者 Secrétaire Général としてギュルヴィッチ教授を補佐するなど多方面に亘って活躍を続けている、フランス学界の第一級の社会学者一人類学者である。同教授は十月十四・十五の両日京都大学で開催された第三十四回日本社会学会にも出席し、十四日午後「アフリカの新興宗教と社会運動」と題する特別講演を行ったのち、ひきつづき約二週間に亘り関西地方に滞在し、京都、大阪、奈良、名古屋、伊勢志摩方面を視察し、伝統的日本の姿と躍進する日本産業の代表的なものの現実を興味深く観察して、東京に向った。この間、十月十八日午後、関西学院大学社会学部において「経済発展における伝統的社会と社会的勢力」と題して、アジア・アフリカの後進国における経済発展および近代化の当面する諸問題について示唆するところの多い講演を約二時間に亘って行った。なお同氏は十月二十一日名古屋でも南山大学でこれとほとんど同趣旨の講演を行い、さらに同月二十五日には大阪大学松下講堂で「動的ならびに批判的人類学の構想」と題する講演を行った。以下に掲載するのは関西学院大学社会学部における講演の翻訳(小関藤一郎訳)である。なお参考のため、同教

授の著作論文の一覧表を末尾に附しておいた。

経済発展における伝統社会と社会的勢力

1 問題の位置づけ

経済発展途上にある国々は、社会学者にとって、急激な変動を経験している社会—その過去の伝統とのきづなをもちながら、しかもその構造および組織の仕方を近代化せざるを得ない社会—についての興味ある状況を提示している。ところでこれらの現象について正確な知識をもつことは、経済発展および近代化政策の成功を相当程度条件づけるものである。この点は過去十ヶ年間世界の広大な地域においてなされてきた経験を評価する理論家も実践家もともに一致して認めているところである。

現在動いている社会構造および社会的勢力を検討するに先立って、予じめ若干の前提をのべておくことが便利である。そうすることによって、問題の本質をよりよく捉え、問題の困難はどういうものであるかを明かにすることができる。

ごく極端に全貌を概括的に図式化していくならば、発展途上にある国々の社会劇を五幕にわかれて演ぜられるものとして捉えることができる。

(1) 初幕は、伝統的といわれる社会構造とそれによって規制される行為様式の場面である。この社会構造は一定水準の技術、経済的活動についての一定の考え方と結びついている。またその社会構造は文明の原始的な、種々な形態および諸種の価値と緊密に結びついている。アジアおよびアフリカにおけるこれら社会構造の研究は極めて強い共同体的構造をもつ社会の存在を明かにしてくれる。それらの社会においては伝統のもつ拘束力は

非常に力強く、かつまた人々の活動は相当程度宗教的色彩をおびている。この後者の点が、これらの社会においては、集団的行動の質の方がその結果生ずる物的財の量よりも重要であることを説明してくれる。すなわち、これらの社会や文明は、ヴァレリーの用語によると、量的統計的性格のもつ決定力が支配的になっていない社会や文明なのである。

(2) 第二幕では、複雑な生産技術や近代的経済の導入によって、程度は種々異なるが、過去との断絶が行われる。その結果、伝統的秩序は破壊され、共同体の統一も崩壊してきている。そうしたことから一部の英米の著者たちはこうした状態に二重的社会 および 経済という表現を与えているが、とくに伝統的部門と近代的部門との共存を強調している。F・ペルー (F. Perroux) はこの点をもっと正しく観察し、よりよい説明を与えているが、上記の状態に対し接合のうまくいっていない社会と経済という表現を用いている。

(3) 第三幕においては、この接合のうまく行われていないことの結果生ずる問題との関係において、社会的勢力やイデオロギーのはたらきを考察しなければならない。これら社会的勢力やイデオロギーは、一方においては、発展の運動を抑制するか、あるいは、理想化された過去への復帰を助長するように働くことがある。すなわち保守的な方向か伝統主義的な方向にはたらくことがある。しかし他方においては、これら社会的勢力やイデオロギーは、経済的および社会的変動を容易ならしめるようにはたらくことがある。その場合には革命的な方向にはたらくのである。これらの社会的勢力やイデオロギーは相互に索制し合いながら、多くの新興国家の現実の不安定醸成に力を与えているのである。

(4) しかしながら、これらの諸勢力は、自らに対して明確な目的を設定することなしには、現実に対して足場を得ることはできない。すなわち、これらの諸勢力はその力の原動力となるような社会および経済のモデルを選択しなければならないのである。ここにわれわれの劇の第四幕が展開する。これらの諸勢力は自由な民主主義国、社会主義国または共産主義国をその範例として、新しい社会

関係の秩序樹立へと向うのである。しかしこの選択は決して簡単なものではなく、何等か現実へ適応することなしには選択は行われぬのである。

(5) 第五幕についていえば、それは全く未来において展開されるものであることが察知されるであろう。第五幕は、今日経済成長および近代化の諸問題に当面している国々の成功、または失敗を明かに示すであろう。その結果が悲劇となるかどうかは主としてこれらの国々の意志によって決定されるが、それはまた豊かな設備をもった先進諸国の理解と意志によっても決定されるのである。これら先進国をネール首相は最近いづれも類似した存在であると評している。何故ならそれら先進国は“同一の神である機械を崇拜する”からであって、共産主義であるかないかはネールにとっては程度の差であるにすぎないのである。

I 若干の事例

以上の叙述は抽象的であり、理論的な外見を提している。そこで今度は事例をあげることによって、以上のべた若干の局面についての説明をすることが必要である。第一に伝統的な社会構造と伝統的文明という関係においてとりあげられる若干の問題を考察していこう。

(1) 伝統的社会構造と伝統的文明

伝統的社会構造や伝統的文明は、長い歴史をもつ伝統に従い、よく知られた社会学的景観として記録されているという長所をもっているが、同時に経済発展の近代的計画と多少とも両立できる行動や態度を条件づけているのである。

(a) 第一例は人口行動のそれである。

人口の発展は経済進歩のもたらす効果と競合し、つぎにはそれを抹殺する危険をもっているが、その度合いに応じて人口の動態は重要である。人口増加のもつ危険は、アジア、アフリカにおいて一般にみられる年間2.5%の増加率は同一生活水準を維持するだけのためにも、年間国民所得の10%をこれに充当することを必要とするという事実を想起すればよく理解されるであろう。家族計画を実行しているインドや、マルサスとマルクスの理論のどちらをとるかを躊躇しながら、その両者を結びつけるにいたった中国の例は人

口増加およびこれに伴う困難に対して対処しなければならぬ必要をよく示している。人口については社会生活の他の部面よりも一層顕著な慣性をはたっている。このことは次のことによって理解されよう。

—後進国というのは最近まで（近代的衛生技術が導入されるまで）死亡率、とくに乳児死亡率が極めて高い国であった。これらの国々では1000に対し40ないし45という高い出生率によって人口の均衡はとれていたのである。

—人口の領域におけるこの高い“生産性”の助長はしばしば若干の社会的、文化的要因によって強められてきた。結婚慣習、性道徳、家族集団の構造、宗教的圧力が直接このことに関係をもっている。人口学者F・ロリマー (F. Lorrimer) はその著書「文化と人口の多産性」の中で産業化以前の、転換期の社会においては人口増加と諸種の社会・文化的要因との間に著しい相関関係の存在することを明かにしている。こうした多くの社会にとっては第一の富は人間であった。こうした傾向は伝統的文明が充分矛盾なく存続する限り維持される。そのもつ意義は以上のべたように人口増加と経済成長との均衡という困難な問題を提起するところにある。すなわち人口増加は今日後進国を青年人口の多い国たらしめることに大きな作用を及ぼしている。15才以下の人口比率が40%というのが後進国の大部分の特長であり、それは南アジア、アフリカ諸国における研究によって証明されている。こうした状況は社会政策上における諸々の困難（児童の就学数の増加、職業訓練、幹部人員養成など）を説明してくれる。それはまた近年アジア、アフリカ諸国に生じている社会運動の多くにおいて青年が演じた役割をも説明してくれる。

(b) 第二例は経済的行為のそれである。経済的行為は伝統的な社会秩序によって条件づけられている。この点に関しては、われわれはいくつかの制度のもつ反経済的性格や蓄積される富に対して人々の示した反応の混乱した状況に全く驚かされるのである。そうした事例の具体的なもの二つを考察していこう。

—マダガスカル島のティモロ (Timoro) 族には王族のカストと貴族のカストだけが行うことを

認められた即位の儀式がある。ところが、それが庶民のカストによっても模倣されるにいたったのである。しかもそれはごく最近おこったことで、それが重要な意味をもっている。というのは、そこにわれわれは近代的経済によって導入された富に対する一つの反応の事例を認めることができるからである。即位の儀式というのは、庶民のカストの成員が近代的経済の導入によって、富を得た場合、その富を仲間の人々に大振舞をすることによって高い地位を認められることをいうのである。しかしこうして得られる権威ある地位はきわめて短期間のものである。それはその財力を振舞って、何日も何日も宴会を連続して行い庶民のカストに対して、歓楽を与えることがつづく限りにおいて、認められるものなのである。村民もカストの仲間もこの宴会を歓迎し、それに対する報酬として、財力を浪費し・誇示する者に対して高い地位を認めるが、財力がつきてしまえばそのまま元の地位にひき戻されてしまうのである。そして富を得た男はこうしてその獲得した富を浪費、乱費のあげく、前よりも一層みじめな地位に陥ちるのである。こうして、このような豪華な宴会の連続というお祭り騒ぎによって、ティモロ社会の底辺からの水平化、平等化運動が定期的に行われるのである。庶民のカストの成員でその物的な富の力や個人的特性によって、個人的に勢力を得るようになるものは、みな一時的には仮の権力の座にはついていても、すぐ元の地位にひき戻されるのである。

こうした制度を研究した社会学者は、この結果ある種の社会的均衡が維持されても、その結果生ずるもっとも重大な帰結は経済的停滞であることに注目している。

以上の事例はそれが明かにしている近代的経済と伝統的文明との非両立性の明かな場合である。次に示す事例は、伝統的な作用と近代的作用によって規定される行為間にみられる中途半端な状態、混乱状態の場合である。

わたくしは、ブラザヴィルとレオポルドヴィルの地域に居住するアフリカ人について、そうした現象を研究する機会をもったことがある。その際、認めた事実は、貯蓄した資本をもった個人が

とる二つの戦略に関するものである。

彼等の間では、資本を蓄積した人間はその資金を真の経済的投資に用いて、利潤をあげ、また個人的な富の獲得につとめることもできるのである。しかしこうした企業者的な精神はその仲間の社会的環境からは受け入れられないのである。そこでそうした場合は極めて稀しかおこらず、主として中心の中都市とかその周辺においてしかおこらない。これに対して人々が一般にとる方法は“社会学的投資”という方法である。すなわち富を蓄積した男はその新しい経済的力を利用して、伝統的な型の高い地位を獲得するかあるいはそれを増強するのである。こうして、その獲得した被保護者の数やその金の効き目の範囲によって、その成功の度合が明かにされるのである。これがきわめて一般的に行われている方法である。こうして経済的な営みは古代的な社会的・文化的な体系によって著しく条件づけられるのである。

(c) 労働に関する事例

近代的経済の結果である財に対する態度ではなくて、近代的労働とくに工業界における労働に対する態度について考えても、同じような指摘がなされるのである。インドの社会学者、ムカージー (D. P. Mukherji) はインドの労働者に対して正確ではあるが、同時に全く驚くべき観察を報告している。ムカージーはインドの企業における労働者の欠勤率の高いこと、不注意、時間観念の乏しいこと、および仕事に対する無頓着さなどの重要性を強調している。彼のこうした見解の中にも、種々のニュアンスの差は認められるが、それらの点は今は触れないこととして、その見解をそのまま認めていこう。問題の本質的なことは彼の見解そのものではない。本質的な教訓は彼がこうした労働者の反応を“健全で、正常である”として示していることである。ムカージーがこれを正常で、健全であることを強調したのは、もとより、インドの工業労働者のストライキの問題をとりあげた場合のことである。ムカージーはこうした示威運動は労働者が、工場や機械の騒音や労働のわずらわしさから離れて、彼等が昔から習熟してきた・そして本能的に承認しているままの生活様式がそのまま存続している農村に戻って、精神の安

らかさと社会的安定を回復しようとする希望によって、大部分決定されていると説明しているのである。

このような研究は、近代的生活様式の迅速な普及に対する多大な障害をなすものと思われるような態度および行為様式についての明白な弁護を含んでいる。それはまた経済発展の脅威に対する伝統的価値の反抗をも示している。経済発展と伝統的価値というこの二つの要求の間に妥協を成立せしめることは可能であろうか。あるいはそれは全く妥協の余地ない条件を調停しようという空しい試みであろうか。これは困難な問題である。しかし日本の例は二つの点に関して肯定的な回答を与えることができたのである。

(d) このようにして、人口行動にせよ、近代的経済という枠内における富や労働に対する態度にせよ、われわれは、ここに、克服されなければならない**非両立性**の問題に直面するのである。そしてその克服は人々の精神に対してと同じく社会関係に対しても積極的なはたらきかけを行うことなしには不可能である。今日なお伝統的な教えによってしかも極めて強く影響をうけている人々をして、経済的発展や工業化の含意する変動に対する適応へと導いていかなければならない。

2) 以上わたくしは、経済発展および工業化以前の段階の社会構造を、この構造によって決定される行動の面から考察したにとどまった。そこで次に、この構造自体がどのように近代社会の建設に有利にはたうか、あるいは、その障害となつてはたらくかを見ていかなければならない。

(a) ところで一番多く人々の注意をひいてきたのはこの中の障害となっている場合である。それについては二つの例をあげることにしよう。

第一例はきわめて**厳格な社会的隔壁の存在する社会**の場合であって、そうした社会は工業化の時代に到達するのに必要な社会的移動を阻止しているのである。その具体的な事例はやはりインドの場合で、インドではガジル Gadgil 教授の表現によると、“社会的情況のもっとも顕著な特徴はカスト制の優越的な勢力”なのである。同教授はカスト問題の専門家として、この要因の歴史的重要性は、今日のインドの社会状況を正確に判断する

ためには、決して過少評価されてはならないことを明かにした。彼は社會の中における人々の占める地位、カストのヒエラルキー、生活水準および知的、教育水準間に緊密な相関關係が存在することを示した調査の結果を想起している。そしてガジル教授は社會の再組織が絶対に必要であることを認め、かつその再組織はカスト制の最底辺におかれている人々の叫んでいる平等の要求が真面目に受け入れられることを含意するのべている。

第二例は封建的大土地所有制が確立している封建的ないし半封建的型の社會の例である。これらの社會には中間的な社會集團が存在していない。それらの社會には、多くの場合、ごく少数の大土地所有者階級が國家權力に奉仕する貴族しか存在せず、彼等は富と權力を掌握しているのに反して、一般大衆はきわめて貧困で、教育もうけない状態にとどまっている。そこには先進國におけるブルジョワジーとか中間階級と同じような存在はみられない。したがって、これら中間的集團のもつ弾力的な作用の欠如は重大な結果をもたらしている。すなわちこれら中間的集團に代って軍隊がしばしば革命的推進力をなしている。

こうした類型の社會では、進歩と福祉の普及は非常におくれている。余剰の富は貧民の困窮を軽減するよりはむしろ特権的集團の富を増強するのに役立つ。そうしたよい例はイラクに見られる。イラクでは經濟の發展は決して國民全體の生活水準の向上をもたらさなかつた。このことが、カセム將軍の軍事革命に対する好餌となつたのである。イランでも政府当局は、今日、こうした脅威に対して極めて敏感となっており、王室は社會を封建的制度から解放するため土地所有や農奴、小作の桎梏に関する一連の改革の実現につとめている。

(b) 以上の事例は簡單であり、またそのため極めて目立つたものであるが、この事例によって、古代的社會構造のある種の要素は**轉換期**においても利用の価値あるものであることを忘れ去ることはできない。そうでないと、全面的な秩序の破壊という危険に當面するおそれも生じてくる。この面は上述の面よりも知られていないことが多い。

II 經濟的變動と社会的技法

以上いろいろ述べてきたところから當然の帰結として出てくる最後の点を指摘することにしよう。われわれは今日次のような本質的に重要な事實を過少評価することを許されない。すなわち、それは前産業的社會の變動はただ単に国内資本の動員と外國からの援助獲得だけを必要とするのではなく、更にまた**新しい適応的態度、新しい行為の仕方、新しい生活の仕方および新しい考え方の發展**を要求しているという事實である。

この發展を推進するのに適切な社会的技法が存在する。いろいろの面をもつナショナルリズムのような、ある種のイデオロギーは、たとえ暫定的であろうと、進歩に対して好意的な情緒のニュー・ディールの建設にきわめて適切である。この意味において後進國における經濟成長を促進するイデオロギーを分析することは不可欠なことである。

經濟成長の政策を研究している經濟學者たちは現在ではナショナルリズムのもつ深い意義をよく認めている。R・バール(R. Barre)教授は最近の刊行物の中において、小兒病と思われるようなナショナルリズムの行きすぎに対してはこれを非難しながらも、ナショナルリズムが社会的統合を強化し、人々のエネルギーを促進し、經濟發展にともなう人間的、社会的犠牲を堪え忍ばせることができるものであることを明かにしている。バール教授のこの断言に対しては一つの条件をつけることが必要である。すなわちナショナルリズムの積極的な効果は、一定の条件の下において、はじめて明確にあらわれるし、また持続することができるのである。またもしナショナルリズムがバルカン化を目ざすような国内的な割拠主義によって弱体化され、またナショナルリズムのもつ活動力が少数の特権階級に奉仕するようにのみはたらくならば、あるいは更にナショナルリズムが社會の知的、物的孤立化を導くようになるならば、その經濟成長を助ける推進力は急速に滅殺されてしまうのである。危険をとまなわない武器とか奇蹟的用具は今日まで存在しなかつたし、今日も存在しないのである。

アジアおよびアフリカにおける諸々のナショナル

リズムの経済発展に対する反動は、われわれに対して、今日のところ福祉への意志よりも、人間の尊厳に対する要求の方が一層決定的な力をもっていることを理解させてくれる。そして、うたがいもなく、ナショナリズムの主要な教訓はこの点にある。ナショナリズムの反動はこの反動をひきおこした国民の性格およびこの反動の主導役である個人の人格を全く作り直していくのである。さらにまた、経済発展に対するナショナリズムの反動はこれら個人および国民を非プロレタリア化する方向にむかうのである。

さて、今や、この講演の結末をつけなければならぬ。その経済および社会構造を“近代化する”ことを最大の関心事としている大多数の国々においては、強力な社会的勢力が解放されている。しかしこれらの社会的勢力は、近東からパキスタンおよびビルマに至るまでの諸国において、軍隊を基盤として強力な権力を確立した一連の革命が示しているように、新しい均衡をつくり出すことには容易に成功していない。

もしも後進国の内的弱点および先進国と後進国間におけるますます顕著となっていく不平等の原因が続いていくなれば、二十世紀の後半は権力の中心が米国に移るか、ソ連に移るかということよりも、むしろ無力と怨恨と緊張の中心が倍增することによって特徴づけられることになるであろう。ここに賭けられたことはきわめて重要な問題であり、それはわれわれ各人に関する問題でもある。これこそ、社会学者にとってまたとない実験の場を提供するものであり、この問題ととりくむことこそ社会学の一つの大きな課題である。

Georges Balandier 教授著作論文目録

1. 著作

Sociologie des Brazzaville noires 1955
Sociologie actuelle de l'Afrique noire 1956
Afrique ambiguë 1957

2. 編著

Les pays sous-développés,—Analyse et perspectives 1950
Le Tiers Monde—sous-développement et développement 1961 (改訂版)
論文, その他
Le Bilan de la sociologie au XX siècle,
(Critique, n. 34. 1949)
Marxisme et ethnologie (Revue Socialiste
n. 30. 1949.)

Aspects de l'évolution sociale chez les Fang du Gabon (Cahiers internationaux de Sociologie, vol. IX 1950)
L'Anthropologie sociale en Grande-Bretagne (Critique, n. 51-52, 1951)
Les conditions sociologiques de l'art noir (L'Art Nègre, 1951)
Approches sociologiques de Brazzaville noires (Africa, 1952)
Contribution à une sociologie de la dépendance (Cahiers Internationaux de Sociologie, vol. XII. 1952)
Notes sur les théories musicales maures, 1952 (avec P. Mercier)
Particularisme et Evolution, Les Pêcheurs Léba, 1952 (avec P. Mcreier)
Evolution du travail industriel (L'Année sociologique, 1953)
Les Villages Gabonais, 1952 (avec J. Cl. Pauvert)
Messianismes et nationalismes en Afrique norie (Cahiers Internationaux de Sociologie, vol. XIV. 1953)
Sociologie de la colonisation et relations entre sociétés globales (Cahiers Internationaux de Sociologie, vol. XVII 1954)
La Famille urbaine en Afrique Centrale (in Renouveau des Idées sur la Famille, 1954)
Conséquences sociales de l'industrialisation et problèmes urbains en Afrique, 1954
Conséquences sociales du progrès techniques dans les pays sous-développés (Sociologm Contemporaine 特別号, vol. III n.1, 1954)
L'Anthropologie appliquée aux problèmes des pays sous-développés, 1954—55
Social Change and Social Problems in Negro Africa (in Africa in the Modern World, 1955)
France—Revue de l'Ethnologie en 1952—54. (in Year-Book of Anthropology, 1955)
Social Implications of Technical Advance in Underdeveloped Countries (Current Sociology, vol. III. 1955)
Déséquilibres socio-culturels et modernisation des pays “sous-développés” (Cahiers Internationaux de Sociologie, vol XX, 1956)
Sociologie des régions sous-développées (in Gurvitch, Traité de Sociologie, 1958)
Sociologie, ethnologie et ethnographie (ibid)
Dynamiques des relations extérieures des sociétés “archaïques” pces, (ibid)
L'Apport synthétique de l'anthropologie et de l'histoire (avec Ch. Morazé, in Les Implications Sociales du Progrès Techniques, 1959)
Tendances de l'ethnologie française I (Cahiers Internationaux de Sociologie, vol XXV, 1959)
Le Contexte Sociologique de la vie politique en Afrique Noire (Revue Française de Science Politique, vol. IX, n.3, 1959.)
Structures sociales traditionnelles et changements économiques (Cahiers d'Etudes Africaines, 1, 1960)
Phénomènes sociaux totaux et Dynamique sociale (Cahiers Internationaux de Sociologie, 1961)
Littérature de l'Afrique et des Amériques noires (in Encyclopédie de la Pléiade)